

## ミルトンの理性観 : Paradise Lost 第3巻を中心に

江川, 琴美  
九州大学人文科学府 : 博士課程単位修得退学

<https://doi.org/10.15017/6791143>

---

出版情報 : 九大英文学. 50, pp.199-214, 2008-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## ミルトンの理性観 —*Paradise Lost* 第3巻を中心に

江川 琴美

ミルトンの神学思想を考える時、ルター、カルヴァンらによる宗教改革思想の基本原則と対比することはあらゆる場面において有意義である。宗教改革の先駆けとなったルターの『キリスト者の自由』<sup>1</sup>では、人間の自由の本質を論ずるにおいて、「理性」(reason)という性質は、特に注目されていない。しかしながら、ミルトン神学では、理性という新しい神学的徳目に強い信頼を置き、それを人間の自由の根幹としている点で特徴的である。

『失樂園』(*Paradise Lost*)第3巻において神が語ることは、ミルトンが自己の神学思想を、荘重な神の言葉でもって力強く、かつ詩という芸術的表現手段でもって敷衍的に表したものであり、ミルトンの神学思想の本質を理解する上で特に看過し難い。そこにおいてミルトンは、時に母音韻(assonance)<sup>2</sup>を意図的に使用して独自の神学思想を伝えようとしていると考えられる。

第3巻の神の言葉で主眼とされるのは、神の摂理と人間の自由との関係である。神は人間を「正しい存在として造った、墮ちることも自由だが、毅然として誘惑者に対して充分抵抗できる能力を持つ者として」(Ⅲ, 98-99)造ったと言い、摂理の正しさを述べる。<sup>3</sup>ミルトンは神が人間にあまねく「理性」と「意志」を与えたと信じた。そしてそれらの能力が与えられた上で、人間には本来自由が許されている、という考えに至った。

特に「理性」は、ミルトンが、人間に救いをもたらす「内なる良心」(conscience)と呼び尊重したものだが、それは、人間の自由のどのよ

うな確証となるのか。この主題を検証するために、本稿では、『失樂園』第3巻における神のことばのうち「理性」についての議論に焦点を当て、神学的思想をことばの音に注目しつつ吟味してゆく。

## 洞察力としての“光”

第3巻は、叙事詩の伝統であるインヴォケイションとして、光への呼びかけから始まる。第1巻、第2巻において描かれた地獄の陰鬱な描写を払拭するかのような、光彩に満ちた場面転換である。ここでミルトンは、光への呼びかけの中に、自分自身の盲目の体験についても詠み込んでいる。第3巻の光への呼びかけは、時に個人的な色彩をも帯びるものであり、ミルトンが熱誠を込めて書いた箇所であると考えられる。

この場面における光は、物質的・物理的な光としての側面と、神の霊の内なる働きとして、人間の内面を照らす洞察力・内なる力としての二つの側面を持っている。4この第3巻の光への呼びかけにおいては、ミルトンは相反するこれら二つの性質を明確に区別して描いてはいないように思われる。

まず、第3巻冒頭の、光へのインヴォケイションを見る。ここにおいて表される光は、神の被造物として、また、神の本質を象徴的に表すものとして、二つの役割を持っていると考えられる。

Hail[,] holy light, offspring of heaven first-born,  
Or of the eternal co-eternal beam  
May I express thee unblamed? since God is light,  
And never but in unapproachèd light  
Dwelt from eternity, dwelt then in thee,  
Bright effluence of bright essence increate.

III, 1-6

1 行目で光を「天の初子」と呼ぶのは、創世記 1 章 1-5 節「初めに、

神は天地を創造された。……神は言われた。“光あれ。” こうして光があった。神は光を見て、良しとされた。……第一の日である。」<sup>5</sup>の反映である。ここでまず光は、神の第一の創造物としてとらえられている。だが、続くコンテクストにおいては光の持つ永遠性(“eternity”)という神秘的側面が特に意識される。続けて光を、「永遠者と同じように永遠を共にする(“co-eternal”)光よ」、「汝、造られざる(“increate”)本質より出でたる輝けるものよ！」と呼ぶとき、光は単なる被造物ではなく、神と同様に永遠性さえも持ったものとしてとらえられている。さらに詩人が3行目のように、「神は光である」と断定して呼ぶときには、光は創造物であると同時に、その創造主自身さえも体現する存在である。この冒頭のインヴォケイションにおいては、神の第一の被造物としての光と、何らかの神性を持つものとして神自身と同一視される光は、渾然一体となって表現されている。ここにおける光のメタファーは、神の霊的な働きを象徴的に表現していると解釈できよう。

光へのインヴォケイションの文脈において、続けてミルトンは、眼病による自らの失明について語る。詩人は、第2巻までで描かれた陰気な地獄から、第3巻においては光さす神の世界へと帰ってきたが、そのまばゆい世界において、何の輝きも知覚することが出来ずにいる。

... thee [i.e. light] I revisit safe,  
And feel thy sovereign vital lamp; but thou  
Revisitsst not these eyes, that roll in vain  
To find thy piercing ray, and find no dawn....

III, 21-24

ファウラー版の註にもある通り、この引用箇所において語られているのは、明らかに肉体的な光の喪失、すなわち、視力の喪失についてである。しかしそれは、先に神の霊的な力の発露としての光に呼びかけた時と、歌いぶりを変えることなく描かれているという特徴がある。<sup>6</sup>ミルトンは霊的、肉体的、に二つの異なる性質を有する光を扱いながらも、敢

えて詩の調子を変えず、一つのトーンでもって描き切っている。

盲目の体験は、ミルトンにとって、詩人としての挫折を招かなかつた。そうではなく、その体験は思索をよりいっそう深める端緒となった。ミルトンは自己の体験を昇華し、より普遍的な思想に思い至る。批評家ウイントは、ルネサンス期の神学者にとっては、神秘的な真理把握の方法として、盲目は視力に勝る、という考えはほとんど常識に近いものであったことを指摘している。<sup>7</sup>この第3巻の文脈に登場する他の四人の慧眼の詩人・預言者たち、とりわけ盲目のホメロスと自分を、運命において、また名声において同等の存在と称するとき、ミルトンの念頭にあるのは、知覚による認識を凌駕する、真理把握の手段としての盲目への憧憬である。<sup>8</sup>これらのことから、ミルトンが失明を、天罰などではなく、神が他の内的な能力を与えて補ってくれる契機としてとらえ、肉体的な能力の喪失にむしろ積極的な意味合いを持たせようとしていることが分かる。

この私的な逸脱の文脈において、さらに光は、神に与えられる人間の内的な洞察力を象徴するものとしての、内なる「眼(“eyes”)(III, 53)として表われる。

So much the rather thou celestial light  
Shine inward, and the mind through all her powers  
Irradiate, there plant eyes, all mist from thence  
Purge and disperse, that I may see and tell  
Of things invisible to mortal sight.

III, 51-55

心という内なる世界において輝く「天の光(“celestial light”)」とは、自然界の一物質としての光ではなく、神の力の発露としての光、恩寵の光を指す。“light”(51), “mind”(52), “eyes”(53), “sight”(55)に共通する [ai]音が成すアソナンスは、これらの概念を音の面から強調し、ここにミルトン神学において特に重要な思想が込められていることを示してい

る。神は死すべき人間の「肉眼(“mortal sight”)」に代わるものとして、「天の光(“celestial light”)」を「心(“the mind”)」の中に、物を見る「眼(“eyes”)」として与える、と解釈することができる。ここにおいて、神の力の霊的な働きの特徴としての光は、内なる啓蒙の光、物事の本質を見極める洞察力、という意味合いを帯びてくる。この内なる世界を照らす啓蒙の光は心の目となり、心を霊的に強め、肉眼では見えない物事の本質を理解し判断する力となる。また、この[ai]音は何らかの主体、すなわち一人称の“ I ”を想起させ、ミルトンの自由論の基本概念と深く関係してくる。この第3巻では、詩人の光へのインヴォケイションは、叙事詩の伝統という枠組みを越えて、続く理性についての議論への導入部、という役割を担っていると考えられる。

### 理性を道標にして

ミルトンは、光に象徴される人間の内なる力を、万人に内在する「理性」と呼ぶ。そして詩的表現において、その性質、働きについて象徴的に説明を加えてゆく。その理性は、意志(will)を正しく働かせるのに大いに役立つ存在であるとされる。ここでは、理性と意志、人間の自由と神の予定という神学的概念を、ミルトンが詩のコンテクストにおいてどのように象徴的に表出しているかを調べ、ミルトンの考える人間の自由とは如何なる状態を指すのかという問題について考察する。

まず、理性は、神のことばによる、神の予定と人間の自由との関係についての叙述の中で触れられる。神は人間の墮落が予定されたものであることを明言するが、その因果関係はいたって明白であり、墮落の責任は人間にあるものとされる。

... [Satan] shall pervert;  
For man will hearken to his glozing lies,  
And easily transgress the sole command,  
Sole pledge of his obedience.... III, 92-95

知識の樹の実を食べてはならないという唯一の命令、そしてそれを厳守することが神への服従の唯一の保証(“pledge”)であるにもかかわらず、人間はその禁を犯すことになる。神が、「セイタンは人間を墮落させる運命にある(“shall pervert”)」と人間を待ち受ける運命について断言した瞬間、それは確定された未来となる。人間が後に犯す罪は、その子々孫々にまで、実に気が遠くなるような長い時代にわたって影響を与え続ける。その墮罪は人間の中にその影響を永く残すにもかかわらず、皮肉にも、神はその預言を、この実に短い二言で要約的に表している。それは、この預言には何の斟酌も加えられないことを示唆している。神は人間の犯す背反行為に対して、人間が誘惑への抵抗力をその創造時に付与されていたことを理由に、自分は何の非難を受けるいわれもないと述べる。

... Ingrate, he had of me

All he could have; I made him just and right,

Sufficient to have stood, though free to fall.

III, 97-99

神は人間を正しい(“just and right”)存在として造った。この正しいという意味は様々な解釈が可能であろうが、ここでは神が造った人間の本質を表すものとして解釈し、神は人間の性質を元来正しいものとして造った、と取る。神は、その創造時に、人間に正しく立つための十分な力の一切を与えていた。人間は、有効に使われたならば誘惑を避けることができたはずのその力、を神から既に付与されていたのである。人間には神に与えられた力に基づく自由が許されている。もちろん、その自由な選択の結果、墮落する可能性をも孕むのであるが。したがって、人間の墮落に関して全ての責めを負うべきはあくまで人間自身なのである。人間は「その創造主も、己の造られ方も、そして己の運命も(“Their maker, or their making, or their fate”)」(III, 113)、そして予定をも非難することはできないとされる。この「予定」にまつわる概念について、ミルトンは特に、「予定(“predestination”)」(III, 114)、「予知

(“foreknowledge”)(III, 116, 118)、「予見(“foreseen”)(III, 121)と三様に微妙にことばを変えて繰り返している。ミルトンは、予定論の理屈によってでさえも、人間の側に責任回避が許されないことを念入りに確認している。たとえ神が「予見、予知」によって人間の行動をあらかじめ把握していたとしても、それは人間の自由意志の上には何ら影響を及ぼすものではなく、また、「予定」によって人間の自由意志による選択権を制限することもない。ミルトンの考える人間の自由意志は、神の支配にも矛盾せず、それほど絶対的なものとされている。

人間に自由が保証されていることの根拠とされるのが、神から充分に与えられた内なる力である。第3巻のコンテキストに抛れば、神に付与された内なる力とは、意志と理性という二つの要素から構成されるものと捉えることが可能である。

What pleasure I form such obedience paid,  
When will and reason (reason also is choice)  
Useless and vain, of freedom both despoiled,  
Made passive both, had served necessity,  
Not me.

III, 107-11

神は言う、意志と理性は元来、共に自由なものである、と。必然(“necessity”)からくる服従は神にとって喜びとはされず、意志と理性は受け身(“passive”)とは正反対の性質、すなわち「積極性」によって特徴付けられている。これら二つの能力が常に「積極性」を持つこと、それがすなわち自由な状態とされる。

Freely they stood who stood, and fell who fell.  
Not free, what proof could they have given sincere  
Of true allegiance, constant faith or love?  
Where only what they needs must do, appeared,

Not what they would, what praise could they receive?

III, 102-06

神が人間に自由を与える代償に人間に要求するのは、「義務的な行為 (“what they needs must do”)(105)ではなく、彼ら自身が望む「自発的な行為 (“what they would”)(106)である。それを選ぶ際に、人間には全幅の自由が許されており、神の予定でさえも人間の選択の上に如何なる影響も与えない。積極性を持ち、自由な選択より発した行為こそ、真の忠誠・信義・愛の証拠となり得、かつ価値があるとされる。

その際、意志は当然、選択であり、理性“もまた”選択である、とされる。意志が物事を選択する能力であるとするならば、理性は意志が選択をする前段階として働くと解釈できる。人間には選択の自由があり、先ず理性に拠って選択をし、次にその判断に基づいて意志による決断するのである。『アレオパジティカ』ではミルトンは理性について、より断定的に言及している。

... many there be that complain of divin Providence for suffering *Adam* to transgresse, foolish tongues! when God gave him reason, he gave him freedom to choose, for reason is but choosing; he had bin else a meer artificiall *Adam*, such an *Adam* as he is in the motions.<sup>9</sup>

蓋し、ミルトンの考える理性とは、自由な選択に他ならない。先ず、他の運命や予定にも縛られず、自己の内なる洞察力のみを頼りに物事の性質を慮る。そして、自由裁量によって判断を下すのである。同じ選択として並べられた「意志」が選択する以前に、この理性によって選択するのであるから、意志以上に、この理性は人間の行為に深く関わる「選択」であるといえる。このように見てきたとき、ミルトンの考える人間の自由の基本的概念とは、人間が自分の「内なる世界において輝」(III, 52)く理性に基づいて、肉体の眼では見抜けぬ物事の本質を見極め自由に判

断し、その結果としてどのような行動をとるか、意志によって自由に選択することができること、と捉えられる。その際、それらの選択は決して受動的なものであってはならない。人形劇の登場人物のように、自己の意思以外の何ものかによって支配され、主権を奪われている状態での選択を、ミルトンは無価値だとする。そこでは、常に積極的な選択、言い換えれば、自己の内面に端を発した、主体的な選びが要求されているということになる。

さらにミルトンは、第3巻 94 行以下において、この理性という概念を「良心(“conscience”)」等、幾通りかに言い換え、彼の救済論の中心に据えながらその神学的な重要性を際立たせようと試みている。その論理によると、神は恩寵(“grace”)として、理性を万人に分け隔てなく与えており、人間の救済は、自己の内部に神が与えた理性を「善用(“well used”)」(III, 196)できるか否かにかかっている、とされている。とりわけ、194-201 行目に表された母音の重なり(アソナンス)は、理性論を、音の面から敷衍的に伝えるものとして興味深い。祈り、悔い改め、ふさわしき従順に導くために、神は人間の心の中に導き手として「良心」を植えたという。

And I will place within them as a guide  
My umpire conscience, whom if they will hear,  
Light after light well used they shall attain,  
And to the end persisting, safe arrive.

III, 194-97

理性(“conscience”)の言い換えとしての“guide”(194)と“umpire”(195)は、[ai]という共通する響きを持っており、これは音の上で理性の二つの役割を関連付け、象徴的に説明するものである。よって、理性は、導き手(“guide”)として、また、神の審判者(“umpire”)として、二つの要素を併せ持つもの、として理解できる。良心は、神に任命されて、人間の心の中で審判者の役割を果たす。まず、良心は第一段階として、

罪人（つみびと）の心の内におそれを生じさせる。次に、彼の前に己の墮罪の真の姿をつきつけ、それに対する神の怒りが正当なものであることを知らしめる。これは結果的に、罪人自身の誤りとそれに対する神の怒りの正当性を強調することにつながり、罪人を絶望と、それに続く悔い改めへと導く、という。<sup>10</sup>第 10 巻において墮落後のアダムに罪の自覚を芽生えさせ、絶望させるのは、この良心の働きによるものである。

... all my evasions vain

And reasonings, though through mazes, lead me still

But to my own conviction: first and last

On me, me only, as the source and spring

Of all corruption, all the blame lights due;

.....

O conscience, into what abyss of fears

And horrors hast thou driven me; out of which

I find no way, from deep to deeper plunged!

X, 829-44

神の審判者である良心は、心の中で物事の善悪を判定する機能を果たし、アダムをして己の罪深さと全ての罪の原因は己自身にあることを思い至らしめる。良心の働きによって、心を根底から揺さぶるような罪の自覚(“conviction”)に囚われたアダムは、もはや自分とその子孫には、すべての救いへの道が断たれたように感じ、絶望に陥る。アダムを己の罪の醜悪な実態と対峙せしめたこの良心とは、神が恩寵として万人の心に植えた、内なる洞察力としての理性に他ならない。

その良心を、「善用(“well used”）」(196)し得るか否かは、各人間にその責任の所在がある。人間がその良心を善く使いその声を聞く、とは、すなわち、理性を正しく働かせて物事の正邪、善悪を判断することを示唆する。善用された良心は、悪に満ちた現世に生きる寄り辺なき存在である人間の、唯一の道標となる。その導きに従う人間は「光(“Light”）」

(196)から光へと先導され、神の救いに「到達する(“arrive”)(197)する、  
ことが出来るのである。反対に、人間が良心の使い方を誤るなら、「墮落  
(“blind”)(200)という誤った道へと迷い込むことになる。この“light”、  
“arrive”、“blind”のアソナンスでもまた、[ai]音が効果的に用いられ、「救  
済」と「墮落」という二つの概念の対立を音の面から際立たせている。

神が人間の救済について語る文脈において、肝要な神学的概念を表す  
これらの表現に共通するのは[ai]音である。すなわち、「良心」について  
説明する文脈におけることばの背後には常に、「私(“I”)」という一人称  
が詠み込まれている。ミルトンはここで、救済と墮落という神学におけ  
る根源的問題は、人間各個人に与えられた良心すなわち理性の問題であ  
るということを示そうとしている。神が恩寵によって人間の失われた力  
を新たにし、暗き心を清め、頑なな心を和らげ、救いの道に導こうとし  
ても、人間には良心による自由な選択が許されている以上、救済は結局  
は個人的な、自我に根ざした問題となるからである。この[ai]音の連続  
が描出するのは、現実の狭間において、自力で正しき選択を下すことを  
厳しく要求される人間(“I”)の、存在の寄る辺なさ、危うさである。

### 創造の模倣と主体——ミルトンの自由論一考

ミルトンは、第3巻198行から201行目の行末にもアソナンスを駆  
使し、音響によって、墮落の可能性と自由との間にある人間の緊張状態  
を浮き彫りにしている。

This my long sufferance and my day of grace  
They who neglect and scorn, shall never taste,  
But hard be hardened, blind be blinded more,  
That they may stumble on, and deeper fall....

III, 198-201

“grace”(198)と “taste”(199)、そしてその次の“more”(200)と

“fall”(201)に見られる母音の重なりに注目すると、そこには、「神の恵み (“grace”)」を「味わい、体験する (“taste”)」ことをしないならば、人間は「さらに (“more”)」 「墮落する (“fall”)」、という意味が隠されている。

さらに注意深く見ると、恩寵(grace)を味わう(taste)、という音の響きの裏には、「救済」とは全く正反対の、「墮罪」の概念も織り込まれている。この“taste”という動詞は、当然、後に人間が知識の木の実(the tree of knowledge)を“taste”する、食べる・味わう、という帰結を連想させる。人間は、後に、神が人間の服従と忠誠の証として植えた知識の樹の実を、神の唯一の命令に逆らって味わい、罪を犯す。本作品のコンテクストにおいては、“taste”という動詞は、単に食物を口にする、という意味以上に、神学的に重要な意味合いを持たされているということに気付く。

この箇所動詞“taste”の持つ意味の重要性についてさらに考察する。OEDによると、“taste”には、“To put to the proof; to try, test.” (I,2)の意味がある。<sup>11</sup>ここで注目すべきはその“test”の意味合いである。動詞“taste”は、「味わう、体験する」という意味だけではなく、“test”すなわち、「あるものの存在や性質を試すこと」、という意味をも含意しているということになる。人間が知識の木の実を“taste”する、食べる、という行為をする瞬間に、動作をしている主体は確かに私 (“I”)である。しかしながら、逆説的に、人間はその行為の主体となって物事を“test”すると同時に、神によって“test”されている、すなわち己の内面的価値としての理性(conscience)を試されている、という解釈も成り立つのではないか。

奇しくも、本来、善に向かって志向すべき自由意志の働きを再確認するのは、墮落に向かう自由な意志について触れられる箇所である。人間の性質(nature)について、それは一言でいうならば「自由(freedom)”(III, 128)という一言に集約されるということ、神は宣言する。

They trespass, authors to themselves in all  
Both what they judge and what they choose; for so

I formed them free, and free they must remain,  
Till they enthrall themselves: I else must change  
Their nature, and revoke the high decree  
Unchangeable, eternal, which ordained  
Their freedom, they themselves ordained their fall.

III, 122-28

神は義務的に示された信仰や行為を評価せず、人間にはあくまで自由な存在として自己の行為の主体となることを求める。ミルトンの考える自由な状態とは、「自らの主体(“authors to themselves”)(122)であること、を指す。「自らの判断(“what they judge”)」と「選択(“what they choose”)(123)とは、言い換えれば自己の理性と意志のことである。それらの主体となり結果的に罪を犯すということは、逆説的に、自由が付与されていることの証明となる。したがって、良き行為であれ悪しき行為であれ、己の選択の主体であること、それこそがミルトンの考える自由の根本なのではないか。その行為が善なるもの、悪なるものどちらにおいても、それは自由な選択の帰結であり、それを自分に命じるのは自分自身なのである。つまり自由な選択の結果、墮落を選んだとしても、それは逆説的に自由意志の働きを再確認させることになる。換言するならば、ミルトンの神学思想において自由とは、自らの理性と自らの意志の両方において **authorship** を発揮し、自ら積極的に、自己の選択の主体となること、といえるのではないか。

神が人間の主体性について言及するとき、そのことば遣いは、それが神の創造の擬似的行為であること想起させる。

... nor can [men] justly accuse  
Their maker, or their making, or their fate;  
As if predestination overruled  
Their will, disposed by absolute decree  
Or high foreknowledge; they themselves decreed

この引用部分中の“decree”、そして前掲引用部中の“ordain”という二つの動詞に共通するのは、人間と神、という相反する性質の二つの主体を主語としている点である。decreeは、115 行目や前掲 126 行目に見られるように、「“神の” 絶対的な命令」、という意味を表すときに使われる一方で、116-17 行目の「“人間が” 彼ら自身に対して叛逆を命じる」、のように、人間の行為について言及する際にも用いられている。また、ordainも、前掲 127-28 行目の「“神の” 意志が人間の自由を定める」のように、神を主語とする場合と、128 行目の「“人間自身が” 彼ら自身の墮落を定めた」のように、人間を主語として取る場合がある。これら二つの動詞の使用は並列されることによって、同じ動詞でもって語られながらもその主体が何であるのかを曖昧にしている。人間を創造したのは神であるが、その創造物の行為を創造するのは被造物である人間自身である。<sup>12</sup>その墮罪という行為の責任の主体は、この効果的な動詞の使用によって、より人間の側にシフトしてゆく。これは、人間の救いや行為に関して、神から人間に、責任の所在が移った瞬間としてとらえられる。ここから言えることは、神の予定の「絶対の命令 (“absolute decree”）」をもってしても、人間の自由意志を抑制することはできず、人間の行為はあくまで人間が自分自身に向かって「命じる (“decree”）」ものである、とする思想である。予定説をもってしても、神への責任転嫁はできず、自己の救済における責任の主体としての「個人」の存在が際立っている。

第3巻における神のことばにおいて、ミルトンは、自己の神学的思想の最も中心をなす理性の概念について語りながら、その背後に、音の効果でもって巧みに、人間の墮落の可能性を詠み込んでいる。このことから、ミルトン神学において、人間の墮落と救済は、個々人の理性の働かせ方に拠っており、その責任は個人 (“I”) に在ると結論付けられる。これらの考察から、ミルトンの考える人間の自由の有り様は、墮落と救済の

緊張状態の只中にあるものとして理解できる。ミルトンは、理性とは選択に他ならず、その選択は自由なものとしたが、ミルトンの考える人間の自由とは、良きにつけ悪しきにつけ、自己の行為において、個人個人が己の行為の創造主(author)たること、すなわち、選択の主体であることを指すのである。

## 註

本稿は、日本ミルトン・センター第61回研究会ワークショップ「ミルトンの自由論再考」において口頭発表した原稿に、加筆修正を加えたものである。

1. 石原 謙訳 マルティン・ルター『新訳 キリスト者の自由・聖書への序言』(岩波文庫, 1999)。
2. OEDによると、母音韻(assonance)の定義の2.a.は“Pros. The correspondence or riming of one word with another in the accented vowel and those which follow, but not in the consonants, as used in the versification of Old French, Spanish, Celtic, and other languages.”となっている。本稿ではこの定義に基づいてPL第3巻の神のこばにおける母音韻の効果を見てみた。
3. 『失樂園』の原詩からの引用は、Alastair Fowler, ed., *John Milton: Paradise Lost*, 2<sup>nd</sup> ed. (London: Longman, 1998)に拠る。訳文は平井正穂訳『失樂園』(岩波文庫, 1996)によるが、論述の都合上、一部拙訳を用いている箇所もある。
4. Lewalskiも、『失樂園』第3巻1-55行目までの光への賛歌は、神という存在の多義性を表出するものだと指摘している。Barbara Kiefer Lewalski, “Paradise Lost” and the Rhetoric of Literary Forms (Princeton: Princeton UP, 1985) 31.
5. 聖書の訳は、『聖書 新共同訳: 旧約聖書続編つき』(日本聖書協会, 1999)を使用した。
6. Fowler, *John Milton: Paradise Lost*, 167-68.
7. 秘儀把握の手段として、盲目に肯定的価値を見出すルネサンス期の神秘思想

については、田中英道(ほか)訳 エドガー・ウィンツ『ルネサンスの異教秘儀』(晶文社, 1986) 52-53.

8. Lewalski, *The Life of John Milton: a Critical Biography*. Rev. ed. (Oxford: Blackwell, 2003) 462.
9. John Milton, *Areopagitica, The Complete Prose Works of John Milton, 1643-1648*, ed. Ernest Sirluck, vol.2 (New Haven: Yale UP, 1959) 527.
10. Diana Trevino Benet, "Adam's Evil Conscience and Satan's Surrogate Fall," *Milton Quarterly* 39(2005): 7-8. Benet は、墮罪後のアダムを絶望から悔い改めへと導く鍵は「罪の意識("evil conscience")」にあるとし、その同じ良心の働きは、『失樂園』において決して最後まで救済されないと考えられてきたセイタンの心理にも見られる、とする新しい解釈を示した。
11. *The Oxford English Dictionary*, 2<sup>nd</sup> ed. (1989) s.v. "taste."
12. 以下の論考の中で Danielson は、『失樂園』における人間は、神の似姿としての側面を強く意識して描かれており、神同様に自主性を持ち、自己の創造的活動の主体となり得る存在であると論じている。Dennis Richard Danielson, *Milton's Good God: a Study in Literary Theodicy* (Cambridge: Cambridge UP, 1982) 106.